

この文書について

私たち、日蓮正宗青年僧侶改革同盟は、日蓮正宗から離脱した若手僧侶の団体です。私たちは全員、もと日蓮正宗の信徒でありました。宗祖・日蓮大聖人の教義を学んでいくうちに、その実践と教えに深く感銘を覚え、信心の偉大さを確信しました。と同時に、より深く日蓮大聖人の仏法を会得し、人類の幸福のために少しでもお役にたちたいと願うようになり、日蓮正宗の管長のもとに弟子入りし、出家して僧侶となりました。日蓮正宗では、管長のことをとくに「法主」と呼んでいます。したがって以下、管長のことを「法主」と称します。私たちが弟子入りしたのは、阿部日顕法主です。

本来、法主とは宗派の代表・責任者として、日蓮大聖人の御精神を深く身に体し、人類の幸福・平和・繁栄を祈り、人々を教導していく信仰上の模範となるべき立場の人でなければなりません。ところが、日顕法主は、信仰上の規範となるような人ではありませんでした。

20年前、日蓮正宗は日本最大の宗教団体である創価学会を破門しましたが、それまでは、法を弘めることも、教義の研鑽も創価学会が、もっぱら積極的に行なっていました。そうした優れた信徒団体を持ったことをいいことに、あろうことか日顕法主は、信仰心も乏しく、自ら弘法に専念することもなく、贅沢に明け暮れ、ひたすら遊興に耽ってばかりいたのです。

法主が、そのような有様ですから、日蓮正宗の宗門(注・宗門とは僧侶の団体のことで、以下、「宗門」と称する)全体に、その雰囲気は蔓延し、宗門全体が腐敗堕落していました。私たちは、宗門に入ってこの事実を知り、愕然としたのは言うまでもありません。

私たちが見た彼らの姿は、宗祖が「「遊戯雑談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生なり」と言われているがごとく、実に僧侶として恥ずべきものでした。

今回の日蓮正宗と創価学会の問題において、最も許しがたいものは、日蓮正宗の阿部日顕法主が創価学会を切り捨てるカット作戦、通称「C作戦」を立案し、謀略と二枚舌を使って、学会を恫喝し、従わぬと見るや、いとも簡単に「破門」にしたことであります。

この狂った法主の姿を見て、私たちは、日興上人が『遺誠置文』に「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」と示されたように、「僧俗差別」「法主絶対」という己義を構えた日顕法主と決別するため、日蓮正宗からの離脱を敢行しました。

僧侶が自門の信徒を謀略によって貶め、切り捨てる宗教など、どこの世界にありましようか。こうした謀略を実行した日顕法主、それに加担した宗門僧侶は、仏法で説く魔の働き存在以外何物でもありません。

宗祖大聖人云く「若し善比丘あって法を壊ぶる者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当にしろべし是の人は仏法の中のお怨なり」と。そのような魔と化した宗門僧侶をそのままにしておいては、大聖人の弟子ではない。私どもが、自らの僧侶生命をも賭け改革に立ち上がった最大の理由は、この一点にあります。

2010年は、日顕法主がその「C作戦」というSGIの「広宣流布運動」破壊の謀略を実行に移して20年目にあたっています。この節目の時に、私たちは日顕法主が創価学会に対して、完全敗北をしたことを宣言する文書を作成し、その文書を日顕法主とその跡を継いだ日如法主に送付しました。

その文書の中で、私たちは、宗門がこのような魔の存在になってしまった根本要因は、日顕法主及び宗門僧侶の意識の根本に根づいている「僧が上、俗が下」との抜きがたい差別意識であると糾弾いたしました。そのような僧俗差別は、一切衆生平等を説く法華経、日蓮大聖人の仏法とは、本来無縁のものであり、日顕法主らは大聖人の教えに真っ向から背いています。

その今の宗門の姿は、大聖人の教えより日顕法主の思想を優先しているのですから、私たちは彼らを「日顕宗」と呼んでいます。彼らは日蓮仏法を歪曲し、檀徒の妄信的な信仰心を利用し、人々を悪道に導いております。私たち改革同盟は、その広布妨害の魔と化した邪宗門と生涯、戦い抜く決意です。

この日顕法主の完全敗北を宣言する本書を通して、多くの方が宗門問題の本質を理解し、「人間を利用する宗教」である日顕宗の悪の実態を深く認識されることを願ってやみません。

2010年12月19日

日蓮正宗青年僧侶改革同盟